

「シャンソウ・モルゲン」

「シャルン・モルゲン」

「スス」

于 曉飛

本稿では イマカン「シャンソウ・モルゲン（香叟莫日根）」、「シャルン・モルゲン（沙倫莫日根）」、「スス（蘇蘇）」の三編、タルング二編とショフリ二編（の梗概）を紹介する。

1. ホジェンについて

ホジェン族は、中国の少数民族のうちで最も人口が少なく、1990年の統計では4245人、黒龍江省の松花江下流、黒龍江流域、烏蘇里江の西側に住んでおり、同江県街津口の八岔赫哲族郷と饒河縣赫哲族郷は主要な村である。ロシア側にはホジェン族と同一グループと見なされているナーナイ族がおり、その人口は約12,000人（ロシアの1989年の統計です）である。

現在は一般の中国人と同じ生活をしている。昔の生活は、漁業と採集で暮らしており、魚や狩の文化が残っている。昔は、魚皮で作った衣服や獣皮の防寒具、保温靴を使っていた。刺し身を食べ、魚と獣肉の食べ方は多種多様である。交通手段は犬橇や木の船であった。シャーマニズム、自然崇拜を信じていた。

ホジェン族では、現在漢語が主で、50才以上はホジェン語を話すが、40代では一部の単語が解るだけで、30代になると全く分からない。ホジェン語は、アルタイ諸語のツングース・満州語に属し、ロシア側に住むナーナイ族の言葉は、ホジェン語と方言の関係にある。

2. 口承文芸について

ホジェン族に伝わる伝承文学には、イマカン（伊瑪堪）、タルング（特倫固）、ショウフリ（説胡力）、ジアリクオ（嫁令闊）がある。イマカンは、英雄叙事詩で、語りの中に謡がはいる。そのテーマにはモルゲン（英雄）やアジエン（首領）がクオリ（神鷹）に変身する女性に助けられて敵や仇を討つ物語、狐仙の物語、シャーマンの物語などがある。タルングは、伝説であるが、歌はついていない。動物や漁業狩猟の言い伝え、氏族の起源と歴史、地方風俗と慣習、シャーマンを題材にしている。ショウフリは、子供のための説話で、寓話、神話、伝説など、短い内容は豊富である。動物、モルゲン、シャーマン、漁や狩り、生活、愛情、ユーモア、短い歌を含む物語である。ジアリクオは、歌謡で、ホジェン音楽特有の曲調をもつ。

3. イマカン、タルング、ショフリについて

イマカンは、ホジエン族の伝承文学の中で、内容が最も豊富かつ複雑で、民族特色が濃く、多くの人に聞いて喜ばれている。長編のイマカンには「マントウ・モルゲン」、「シルダル・モルゲン」等があり、漢字では長さ15万字位、語り歌うと10数時間—20数時間かかる。一方短いイマカンは、神話や日常生活の物語で、演じる時間は10数分で、2、30分を越えるものは少なく、「スス」、「長虫兄弟」、「抗婚」などあり、内容は非常に複雑である。イマカンは、狩や漁で露営したとき歌われるだけでなく、村で冬の夜、または冠婚葬祭時に歌われる。場所は一般に漁場の網置き場や狩猟の野营地、採集に出かけた宿、また冬の暖かいオンドルの上である。

1950年代半ばから約40年間採録整理されたイマカンは下記の9部でその内7部が発表されている。「アントウ・モルゲン」(1958年採録、語り謡手：呉進才)、「マンドウ・モルゲン」(1981年、葛徳勝)、「シアンソウ・モルゲン」(1981年、葛徳勝)、「アガデ・モルゲン」(1981年、葛徳勝)、「マルトウ・モルゲン」(1975,1981,1986年、尤樹林)、「シルダル・モルゲン」(1983年、葛徳勝)、「ムドウリ・モルゲン」(1984年、葛徳勝)、「ウフサ・モルゲン」(1987年、葛徳勝)、「シャルン・モルゲン」(1988年、葛徳勝)。

タルングの語源は、「真実、事件の物語」という意味で、短編で謡が入らず、語りのみである。人に信じさせるため、事実を基に自分で見聞きしたように一人称で語る。イマカンと同じ主題を扱っているものがある。漁猟、氏族の歴史と起源、地方風俗習慣、シャーマンを題材とした伝説である。

ショフリには、動物説話、英雄やシャーマン、漁猟の物語、世間話、恋愛譚、滑稽譚がある。ショフリは、ツングース—満語族に共通な言葉で、物語という意味であるが、別に異民族からきた物語という意味を持っている。ショフリは、イマカンやニンマン(ナーナイのイマカン)に大きな影響を与えている。時代とともに、部族外と部族内の区別が薄れ、現在では物語という意味で使われている。

タルングとショフリは、1958年から1983年まで採録整理されただけで、約90編ある。語り手は、イマカンの語り手と同じである。

4. テキストについて

4-1. イマカン「シャンソウ・モルゲン(香叟莫日根)」

出典：“香叟莫日根”、黒龍江民間文学、第二集(赫哲族民間文学選集)[2]pp.183-271, 中国民間文芸研究会黒龍江分会(1981年ハルビン)

あらすじ 昔、松花江に兄弟が住んでいた。弟シャンソウは20歳になるが、何もできず、兄が一生懸命狩をし、漁をし、弟を養っていた。兄が遠く北海に嫁を探しに行くが、戻ってこないで、シャンソウは兄を探しに北海に出かけた。兄が嫁ウエンチン・ダドを得るために出された難題、「怪獣、白鳥、猪を捕らえ、神に捧げる」を、シャンソウが実現し、兄は嫁を得ることができた。この時から、シャンソウは力を発揮し始めた。シャンソウは、西に

両親の仇を探し、復讐に出かけた。はじめに戦った城主フーラホンと和解し、彼の妹フーランを嫁にした。このとき出された条件は「金の鹿を捕る」ことであったが、難なくやり遂げた。さらに、フーラホンと西へ進み、城主パイルー・モルゲンと戦うが、負けそうになる。そこを、兄嫁が連れてきたバージン・ダドが変身した鷹（コリ）に助けられ、パイルーを打ち負かした。そのお礼に、バージン・ダドの国へ行き、結婚を申し込む。そのとき出された難問は、「そのこない桶で水を山頂まで運ぶ」、「竜の爪と鼻を神に捧げる」であったが、ウエンチン・ダドの助けでやり遂げることができて、彼女を嫁にした。西の戦線に戻り、兄嫁、妻たちの助けを受けて、両親の仇を討ち、敵の妹を嫁にし、民を連れて、船に乗り故郷に凱旋した。

解説：1980年と1981年の二回かけて採録された。1980年二時間、1981年六日掛けて六時間の採録時間であった。1981年翻訳は採録と同時進行し、一ヶ月後に出来上がった。1984年省の最優秀民間文学作品賞を受けている。以前の発表されたイマカンの主人公と異なり、この作品では、主人公シャンソウ・モルゲンはシャーマンでないが、全編を読んでもとシャーマン性が見られる。

4-2. イマカン「シャルン・モルゲン(沙倫莫日根)」

出典：“沙倫莫日根”、伊瑪堪（下巻）[3] pp. 263-318 黒龍江人民出版社（1998年）

あらすじ ウスリー江の源流にイマン村があり、シャルン・モルゲンは、父母と姉と四人で暮らしていた。シャルンは20歳になったがまだ嫁がない。イエラグ村で娘の婿を探している人が居る。難題を解決した人が婿になれると姉が聞いてきて弟に勧めた。難題は「娘が川に落とした金魚の飾りの首飾りを探し出すこと」であった。多くの若者が江にもぐり探したが、淵に住む怪魚アオハ魚に出会い、首飾りを探せなかった。しかし、シャルンは、金の斧を持ち江に潜り、怪魚を殺し、腹にあった首飾りを取りかえした。しかし、他の若者が納得せず、「百歩離れたところから、銭を射通す。200キロの石を持ち上げる。怪獣ウルグリ竜を殺す」の三つ難問を出したが、すべてを解決し、娘を嫁にすることができた。

解説：これは葛徳勝が謡った最後のイマカンである。1987年黒龍江省民俗研究所研究員張嘉濱、副研究員葛若玉が採録した。採録には、毎日約一時間、一週間かかった。採録したものをホジエンの尤志賢が翻訳整理した。国際音標をつけものは、1989年「赫哲族伊瑪堪選」に載せられている。

4-3. イマカン「スス」

出典：“蘇蘇”、中国少数民族民間文学叢書・故事大系「赫哲族民間故事選」、[4]pp. 9-11、上海文芸出版（1982年）

あらすじ 昔、川辺に兄弟が住んでいた。山や川には生き物や木の実が少なかった。兄はやっと嫁をもらった。弟は、何もできず、毎日ぶらぶらしていたので、兄嫁に家を追い出された。弟は、川の流れに沿っていこうと木を流れに投げ込んだが、渦巻いていたので流れが分からず、どちらへ行けばよいか分からなかった。途方に暮れ、川辺で「スス」と謡っているうちに、彼の体の骨と皮はばらばらになり、水鳥、魚、貝、海老に変わった。兄は、いなくなった弟を悲しんだが、豊富になった生き物は、弟が残していったものだ考えた。

解説：1963年8月に採録され、尤葦氏が語り、馬名超が整理した。これは、「イマカン小唱」と呼ばれ、語りの中に、謡も入っている。イマカンでは、「ハーリラ ハーリラ」で謡いが始まるが、ここでは「スス スス」で謡いが始まるのが特徴である。

4-4. タルング「白城人の子孫」

出典：「白城人的后代」中国少数民族民間文学叢書・故事大系「赫哲族民間故事選」、[5]pp. 1-4、上海文芸出版（1982年）

解説：1976年6月、吳連貴と葛徳勝が語り、尤志賢と黄任遠が採録、整理した。ホジェン人の起源を述べた物語である。

4-5. タルング「七兄弟」

出典：“七兄弟”、中国少数民族民間文学叢書・故事大系「赫哲族民間故事選」、[6]pp. 5-6、上海文芸出版（1982年）

解説：1975年6月に、吳連貴が語り、黄任遠が採録、整理した。ホジェン人の七つの苗字「蘇、卒、付、尤、吳、葛、芦」の由来を語るものである。

4-6. ショフリ「姉と弟」

出典：“姉弟二人”、中国少数民族民間文学叢書・故事大系「赫哲族民間故事選」、[7]pp. 7-8、上海文芸出版（1982年）

解説：畢淑芬が語り、韓福德が整理した。姉と弟が結婚した話である。

4-7. ショフリ「蛇娘」

出典：筆者が採録整理した物語。

時間：2000年1月3日

場所：同江県街津口

語り手：尤文蘭 当時57歳

ホジェン語で語ったものを直接採録し、整理した物語である。

5.イマカン「シャンソウ・モルゲン(香叟莫日根)」の梗概

シャンソウ・モルゲン

昔々、松花江の中流に、兄弟が住んでいた。弟シャンソウは20歳になるが、何もできず、食べて寝るだけの怠け者であった。兄は、一生懸命狩をし、漁をして、弟を養っていた。周囲には人が住んでいないので、兄は、遠く北海に行つて嫁を探してくることにし、弟に対して言った、「私が出かける。遅くとも十日で帰ってくる。もし十日を経つても帰つてこなかったら、北海まで来て俺を捜し出せ！」

十日過ぎても兄は帰つてこなかった。彼は、鍋の中に肉を入れ調理し、すっかり食べ尽くした。腹いっぱい食べた後、彼は祈りを捧げた。神の助けにより兄のところまで行くことができた。

兄の結婚条件達成を援助

兄は北海に着いたとき、その若い娘は、「怪獣、白鳥、猪の三匹を捕らえ神への供物にできたならば、嫁になる」という条件を出した。しかし兄は十日を過ぎても、一匹も捕まえることができなかった。

弟は兄に替わつて捕まえに行った。険しい大きな岩石の洞窟に怪獣がいた。シャンソウが洞窟の前までいくと、怪獣は突然洞窟の中から襲つてきた。シャンソウは矢で怪獣の心臓を貫いた。

怪獣を背負つて帰る途中、池に着いた。白鳥が目に入った。その白鳥は逃げようと羽ばたきしたところを、シャンソウの矢で射殺された。

シャンソウは、捕まえた獲物を背負い山道を歩いていると、猪が口で穴を掘っていた。猪が、人がくるのに気づいたときには、シャンソウの矢で心臓を射抜かれていた。

シャンソウは三匹の獲物を神に捧げた。ウェンチン・ダドは心霊祭の後、シャンソウの兄と結婚し、一緒に家に帰った。

シャンソウ・モルゲンの西征出発

シャンソウは家に着いて何日かの後、大きな帆船を作り、舳に鷹を刻み込んだ。シャンソウは兄に言った。「明日俺は出かける。西にゆき両親の敵を探し復讐するつもりだ。」

翌日、シャンソウは舟に乗り西に向かって出発した。

舟を走らせ何日か経つた時、一羽の鷹が飛んできて、マストに止まり、シャンソウに言った。「義弟よ、私は兄嫁が変身した鷹です。あなたに忠告に来ました。舟に乗つただ自分を信じて行きなさい。自分の関係ないことにかまつてはいけません。」シャンソウは答えた。

「姉さん、わかっています！」

シャンソウは前に進み、城主フーラオホンと出会つた。二人は取組み合いを始めた。ずつ

と正午まで続け、フーラオホンはただ攻撃を受け止めるだけで、もう攻める力がなくなっていた。フーラオホンの弟のフークーオーは彼に替わってしばらく戦ったが、負けてきた。この時、城から一羽の鷹が飛んできて、二人とシャンソウに、仲直りして兄弟の契りを結ぶよう忠告した。この鷹はフーラオホンの妹のフーランであった。

兄弟二人は妹の話聞いて、シャンソウを城へ招き、酒をふるまった。

シャンソウ・モルゲン嫁を娶る

そこで、フーラオホンは妹フーランをシャンソウの嫁にすることを承諾した。条件が一つあった。山の中にいる金鹿を捕まえてこい、というものであった。

シャンソウが弓矢を持って山へゆくと、山の谷間付近で、金鹿が目に入った。彼は身を低く隠れていると、金鹿はゆっくりと通り過ぎていった。木の葉にふれてサッサッという音がくたので、急いで手で木の葉をつかんだが、また木の枝に衣服が引っかかり破れる音がした。彼が金鹿から五十歩のところまで来たとき、金鹿は頭を起こして言った。「わしはこの山中に住んで千年になり、いろんな立派な英雄を見たが、お前ほどわしの前まで来たやつはいない。わしは今日強敵に出会ったようだ。大急ぎで逃げなければならん。」金鹿は言い終わると、さっと逃げ出そうとしたが、シャンソウは全身の力を絞り弓を引き矢を放った。矢は、金鹿の心臓を射抜き、金鹿はその場で死んだ。

シャンソウは皮紐で縛り肩に担いだが、重さ 350-400 キロはある。シャンソウは金鹿を担いで帰り、神に供え、フーランと結婚した。

パイルー・モルゲンとの戦い

シャンソウ・モルゲンは再び、西へ遠征に出発した。フーラオホンは彼に同行し、舟に乗り進んだ。途中で鷹が飛んできて、先はパイルー・モルゲンの地であると知らせた。

しばらくして、城から十数里離れた場所に着くと、パイルー・ダドと名乗る城主の妹の変身した鷹が飛んできて、「お前らをひどい目に遭わせてやる」と言った。マストを砕き、舟を粉々にし、フーラオホンとシャンソウは川の中に落とされた。

二人は岸へ上がり、城の出入り口まで行き、城主のパイルー・モルゲンと出会った。シャンソウとパイルーは取組み合いになり、なかなか離れず、知らないうちに、山の上まで来ていた。

この時、パイルー・モルゲンには十分力があり、シャンソウの肩を力づくで引き、カバの木に掛けた。シャンソウは痛く、意識が消そうだった。

フーラオホンは、二人を追いかけて、神木の下まで来た。パイルーはフーラオホンを神木に捧げるため、フーラオホンを神木の上に引っかけた。

シャンソウ・モルゲン救出

この時、南側から四羽の鷹が飛んできた。彼女たちはシャンソウの兄嫁とフーラオホンの

妻たちであり、急いで助けに来たのだ。彼女たちは全身の力で神木に激突したが、神木は二回揺れてシャンソウとフーラオホンは衝撃で気を失ってしまった。

シャンソウの兄嫁のウェンチン・ダドは、二人が死にそうであるのを見て、急いでほかの3人に命じて付近の暗闇でシャンソウら二人を保護させて、自らは北海まで飛んで、姉のハージン・ダドに助けを求めに行った。

間もなく、北側からまた二羽の鷹スーイェンとノンチャンが飛んできた。この二人は神木の側まで飛び、木の上にシャンソウとフーラオホンが引っかけられているのを見て、助ける相談をした。この二羽の鷹は空高く飛び、くちばしを一緒にくっつけ、全身の力を集中させ、翼を広げ、下に向かって突進し、頭を神木にぶつけた。「ジャン」という音が響き、火花が吹き二羽の鷹は意識がなくなった。

申の刻を過ぎると、北の方から一羽の鷹が飛んで来て、その口が金や銅のような閃光を出し、目は茶碗ぐらいの大きさで、真っ白な首を持ち、五色の花の点が付いた体で光を放っている。この鷹はウェンチン・ダドが連れてきた姉のハージン・ダドであった。彼女は空高く、銅のような口を開け、茶碗のような目で睨み付けながら飛んで、神仏に祈りを捧げながらこう言った。「多くの神よ、すべて私の腕の力となるように助けにきてください。」祈りが終わると、彼女は急に力を出して、両目から涙が枯れるまで泣くと、二羽の鷹とともに空高く飛んだ。

三羽の鷹は嘴をあわせ、神木に向かってぶつかっていった。空中でたちまち鳥のような雲だけが見えると、雷が落ちて稲妻がとどろき、無数の金の光を吐き出すと神木に落ちた。大きな音が鳴り響き、地面が動き、山が揺れて、雷が落ちた神の木は地面に倒れた。鷹は円を描くように回るとすぐに飛んでいった。

まもなくシャンソウとフーラオホンは息をふきかえした。彼らはダドたちの介抱ですぐに健康を取り戻した。数日後、数人の女性は鷹に変わって飛んでいった。シャンソウとフーラオホンはまた復讐のためにパイルーを探しに行った。

パイルー・モルゲンに再挑戦

城門でシャンソウはパイルーを見つけ言った。「耳の穴をかつぼじってよく聞け、お前の神木は役立たずだ。俺も生き返ってお前と戦うために来た。あとお前には何がある！」

パイルーは言った。「おまえ、俺に神木に三日も掛けられていた。ハージンがお前を助けなかったら、命はなかった。神木から逃れても、俺の両拳からは逃げられないぞ。」

言い終わると、パイルーとシャンソウは互いに組み合って、殴り合いをはじめた。

この時、頭上に一羽の鷹が飛んできて、パイルーに向かって言った。「お兄さん、私は妹です。すぐに手を放して、仲直りをしてください。」しかし、パイルーはこれを聞かず、その鷹は飛び去った。

シャンソウはこの時心の中で石のお爺さん、お婆さんに祈ると、彼らはシャンソウに九虎の力を与え、パイルーを打ち負かした。空には九つの雲が生じ、一つの煙に変わりシャンソ

ウの体に入った。シャンソウは全身の力を感じると、ますます激しくパイルーを叩きつけた。

パイルーは左右のかかとで蹴られ、視界がはっきりしなくなった。彼は跪いて命乞いをしたが、シャンソウは「お前に用はない。」と三発殴り、二発蹴ってパイルーを殺した。

城の権力者が死ぬと、その城の全ての人が降伏した。

フーラン・ダド救助

シャンソウとフーラオホンが酒を飲み祝っていたところ、シャンソウの兄嫁のウェンチン・ダドと妻のフーラン・ダドはパイルー・ダドを護送して来た。そして彼にハージン・ダドがパイルー・ダドを助けた経緯を話した。

もともとパイルー・ダドは兄にシャンソウと仲直りすることを勧めたが、兄パイルーは聞かず、戦って命を落とした。パイルー・ダドは兄が死ぬと、南山へ逃げ、山の神に頼んで彼女を石に変えさせた。これを聞いたフーラン・ダドは、ウェンチンを探し、ウェンチンを引き連れてハージンを探しにいった。二人は、パイルー・ダドを助けることをハージンにの心を動かし、三人で救いにいくことを承諾した。

ハージンは彼女たち二人と一緒に南山へ飛んでいき、神に頼み、全身の力で、空高くから急降下した。雷鳴を轟かし、石を粉々にした。シャンソウはこれを知り、ハージンは自分とフーラオホンを助けただけでなく、パイルー・ダドも救ってくれたお礼を言いに行くこととした。

ハージン・ダドの国へ

シャンソウモルゲンは馬に乗り、山を登って、北海へ行った。北海は霧が立ち込めていて、縁も岸もなく、海と空がつながっている。シャンソウは手綱を緩めて馬に言った。「お前はここで草を食べて俺を待て。」馬は頭を下げ、草を食べはじめた。

シャンソウは海辺に立ち、神に言った。「神様、もし私が両親の仇を討つことができるなら、私を飛ばして海を越させてください。」

少したつと南東の方から一つの雲が飛んできて、シャンソウを乗せ、強い風に彼を空へ飛ばした。彼は目を閉じて、ただ両耳で自然の風を感じていたが、風が止んだことに気づいた。目を開けると、あるクヌギの木の丘に着いた。その前方には金閃光を放つ山があり、東方には銀閃光を放つ山がある。彼は二つの山の間の大きな道に沿って歩いた。

途中、道の傍らの一本の木に弓と矢が掛かっていた。彼はそれを持って歩きつづけた。湿地に来ると二頭の鹿に出会った。鹿は丁度タアトウ草を食べていた。一頭の鹿が首を伸ばし言った。「お前は本当に強い英雄だ。ここに住んで千年になり、たくさんの英雄を見たが、ここまで私に接近できるお前のような者はいなかった。もしお前に能力があるなら私が走る影を見せよう。もし能力がないなら影すら見えない。」

シャンソウは神に言った。「今、ハージンという娘の恩に感謝するために二頭の鹿を捕りに来た。もし私に福があるのなら、神よ私をお守りください。この二頭の鹿を捕まえさせて

ください！」

彼は力を入れて弓を引き、ただ二頭の鹿が飛び跳ねているのを見るだけで二頭は地面に倒れた。見ると、一本の矢が二頭の鹿を倒していた。神の御加護があった。皮を剥ぎ、二頭の鹿を縛り担いで、丘の大きな道を歩いた。一里歩くと、一条の光を放つ金の家を発見した。

彼は金の家の西側の玄関に行き、二頭の鹿を神棚に供えた。この時、彼が玄関に一人の娘がいるのを見て、前に進み一礼をして尋ねた。「ここにハージンという娘さんはいますか？」

この娘は、舌を出して、笑いながら家の中へ走っていった。まもなく、中からおばあさんが出てきて、言った。「あなたのような男がここへ何しにきたの。」

シャンソウは答えた。「私はシャンソウといます。家は松花江の中流にあります。両親は早くに捕虜となって、連れて行かれたので、家にはただ兄弟二人だけが残されました。両親の仇を打つために、私は西へ向かいました。途中でパイルーに出くわしました。彼の両親の神が力がすごく、私は神木に吊るされて、もう少しで死ぬところでした。ハージンのお陰で、助かりました。今回私は二頭の鹿をあなた方に持ってきました。一つは感謝のためで、一つは求婚のためです。」

求婚難題

話している時に、金山から老人が歩いてきた。彼はシャンソウの前に来て、じろじろと見て言った。「シャンソウ、私の言う事を聞け。うちの娘ハージンを娶るつもりならば、二つの事をしなければならない。一つは底のない桶を使って、水を山頂まで担いでいけ。もう一つは深い泉に住む一角竜を捕まえて、肉を神に捧げるのだ。」

シャンソウは老人の条件を聞いて、思った。「なんて大変なんだ！底の無い桶でどうやって担いでいけようか、千年の一角竜をどうやって捕まえるんだ？やってみるしかないな。」

この時、シャンソウの守護神が耳元で言った。「安心なさい、私が桶の底になっておまえを助けてやろう！」

まもなく、ハージンは底の無い桶を一つ選び、水をいっぱい入れて、担いで山頂へ向かっていった。シャンソウも底の無い桶に水をいっぱいにして、担いで急いで山頂へ行った。

山頂に着いて、シャンソウがハージンの桶を見ると、依然として水はいっぱい、一滴も漏れてはいなかった。ハージンが振り返ってシャンソウの桶を見ると、同じく水がいっぱいだった。ハージンは舌を出して、笑いながら、山を降りて家へ走っていった。

ハージンが行った後、シャンソウの守護神は言った。「深い泉の竜を捕まえるには、ハージンに助けを求めるしかない。彼女の持っている金の鎖で、竜を捕まえる事が出来る。」

シャンソウはハージンの部屋へ行って、跪いて言った。「私の命の恩人よ！私に答えて欲しい。」

ハージンは尋ねた。「なんですか？」

シャンソウは答えて、「竜を捕まえるために、あなたの金の鎖を貸して欲しい！」

ハージンは彼が跪いて立ち上がらないのを見て、部屋から金の鎖を持ってきて、シャンソ

ウに渡して言った。「泉へ投げ込むと、この金の鎖は独りずに竜の鼻をつかみます。あなたが外へ引っ張り出して、あなたは竜の爪をつかんで、持って帰ってきてください。」

シャンソウは金の鎖をもって、竜の住む深い泉へたどり着いた。シャンソウは金の鎖を皮ひもへつないで、泉へ投げ込んだ。まもなく泉から水しぶきが高く上がった。彼が引っ張ると、泉の中から唸りながら、竜の頭が出てきた。竜はシャンソウを見て言った。「シャンソウ、おまえは松花江の中流に住んでいるのに、なぜわしを捕まえに来た？わしとおまえには仇は無い！あのばかじじいめ、奴の年取った娘のために、私を捕まえに来たんだろう。」

竜は言い終わると、口から高い水柱を吹き上げて、シャンソウの服に振りかけてずぶ濡れにした。

シャンソウは竜を泉の端へ引きよせ、地上へ引き倒した。見ると、竜の目は茶碗のように大きく、頭には長い角が一本あり、光を放っていた。シャンソウは皮ひもを取り出し、竜を縛り上げた。彼は思った。どうやって竜を持ち帰ろうか？引っ張っていくと、竜は死んでしまう、担いでいくには、竜はとても大きく、厄介だ。シャンソウは神のグーダーマーファを思い出して、東南へ向かって叫んだ。「グーダーマーファ、グーダーマーファ！早く来て、竜をハージンの家まで運ぶために、私に力を貸してください。」

まもなく東南から雲が流れてきて、ザーザーと風の音をたて、一瞬にして彼のところへやってきた。このグーダーマーファはシャンソウに向かって頭を振って、腰帯を下ろして、一本の腕くらいの太さの皮縄を取り出し、竜に三回まわして、一瞬のうちに竜を担いで飛んでいった。

シャンソウは後からハージンの家へ行った。ハージンの家へつくと、彼はすぐにあの竜を見た、既に部屋の西の台に置いてあった。

ハージンは楽しそうに迎えて、彼を部屋へ招き入れた。ハージンはまた、神帽をかぶり、神服を着て、腰に鈴を下げ、神の太鼓を持ち、叩きならした。彼女は、竜の周りを三回まわって、歌った。

“ムリラムリラムリラムリラ——
おじいちゃん——私のお父さん、
おばあちゃん——私のお母さん！
あなた達の言った二つの事を、
シャンソウはすべてやりました。
彼は求婚しています、
女はただ応じるしかありません。”

彼女は振り返って竜に向かっていった。「竜よ竜、今日はあなたの命にとどめをさします。しかし、あなたの爪を一節、あなたの鼻をひとかけら、あなたの舌を一切れ、切り取らせれば、許しましょう。早く舌をお出しなさい。すぐしないと殺してしまいますよ。」

竜は思った、やはり命は大切だ！舌を一切れなんてかまわない。鼻をひとかけらも大したことではない。少しずつ出して、命が残せばいい。竜は口をあけて、舌を伸ばした。

ハージンは前に出て、刀で竜の舌を一切れ、また鼻をひとかけら、爪を一節切り取った。終わって竜に言った。「自分の深い泉へお戻りなさい！」

竜は頭を上げると、口から水を吹き上げて、すぐ霧と雲に変わり、雲と霧を操って、深い泉へ飛んでいった。

ハージンは切り取った竜の舌と鼻、爪を細かくきざんで神を祭った。それからハージンとシャンソウは一緒に家に入り、酒を飲み始めた。

シャンソウ・モルゲン復帰

酒を飲みながらハージンは言った。「シャンソウ、二つの条件をあなたはやり遂げ、あなたの要求に私も答えます。今義兄弟のフーラオホンは百五十艘もの舟を作り、あなたが帰るのを待っています。」

シャンソウは聞くと、いくつかの事を達成できたことを大変喜んだ。彼は御飯を食べ終え、荷物を片づけ先に戻った。

彼が海辺に着いた時、彼の馬はまだ草を食べ彼を待っていた。

彼は馬に乗り、岸に沿って行った。シャンソウは馬から下り、大きな舟に乗り、フーラオホン達と酒をのみながら言った。「私の妻の兄よ、あなたは城の人々を故郷へ連れて帰りなさい。私は女達とさらに西へ行きます。」

フーラオホンはシャンソウと別れ、舟を率いて東へ向かった。

シャンソウは馬に乗って西へいき、正午近くに一軒の家の門前につき、馬を下りた。家に入ると一人のおばあさんがオンドルに座っていた。シャンソウを見て、尋ねた。「どこから来て、どこへいくのかね。」

シャンソウは言った。「私は松花江の中流から来て、先の城までいくところです。お腹が空きました、食べるものを作って下さい。」

おばあさんはオンドルから降り台所へいき、食事を作り、二つの卓に並べた。

シャンソウは思った。このおばあさんは私一人にどうしてこんなに沢山の食事をもてなすのか。このときドアが開き、六、七人の女達が入ってきた。見ると、自分の妻達と兄嫁と従兄弟だった。シャンソウと彼女たちは一緒に飲み食いし三日休んだ。

四日目、ハージンはシャンソウに言った。

「あなたがここから百里いくと、城主タイルーの管轄の範囲です。彼はもうあなたがいくのを知っていて、弓と矢を用意しています。タイルーには一人の弟と一人の妹がいて、手腕が優れています。もしも危なかったら、私の両親の神を呼んで助けてもらってください。」ハージンは言い終わると、鷹に変わり、女をみな率いて飛んでいった。シャンソウは一人馬に乗り西を目指した。

タイルー・モルゲンとの戦い

彼が丁度城の入口につくと、城主タイルーに出くわした。

タイラーはののしった。「松花江の中流に住むシャンソウ、おまえは幾つか城を征服しているが、おれは認めんぞ。ただちに立ち去れ、もし私と敵対する勇気があるなら、すぐお前の命を取ってやるぞ。」シャンソウは声を出さず、馬を下りてタイラーと殴り合いをはじめた。

この時、城の上空で二つの群れの鷹も争い始め、黒い雲のようだった。一方はシャンソウの妻と従妹と兄嫁で、一方はタイラーの息子の嫁と兄弟の嫁と妹であった。タイラーの息子の嫁が瞬く間に何百もの鷹に変わりハージン達を囲んだ。ハージンは慌てず急がず、胸からハンカチを取り出し、空中になげた。それは百あまりの鷹に変わり飛んで行った。フーランが見るとやはり相手の鷹の方が多い。また胸からハンカチを取り出し、前に投げ、百あまりの鷹に変わり、迎え撃った。

何百もの鷹が空中で闘い、まもなくタイラー側の鷹はみな次々と落とされた。

また、シャンソウとタイラーは激しく殴り合った。突然、タイラーの体から熱湯が出てきて、シャンソウは耐えられないほど痛み、手も顔もすっかりやけどした。

シャンソウはまずいと思い、後ろへ跳んで、大声でグーダーマーファーを呼んだ。「グーダーマーファー、すぐに現れて、化け物のようなタイラーが降伏するよう助けて下さい。」

叫びおわると、南の空から一つの雲が稲妻のように飛んできた。シャンソウの頭上で雲はとまった。上にグーダーマーファーが立っていた。グーダーマーファーはシャンソウによろろと言い、手でそっとタイラーを空中にぶら下げ、手を放すと、タイラーは北山へ落ち、死んだ。

タイラーの弟のジャークターローは兄の仇を討つために、シャンソウと闘った。何回か手合わせをしてやっと、ジャークターローは自分がシャンソウの相手でないと感じ、最後の手段を使った。鳩尾から火を噴き出し、シャンソウに火を付けた。シャンソウはしきりに抵抗し、出てくる炎を消した時、グーターマーファーがまた飛んできて、ジャークターローを引き上げ、南山へ落とした。

シャンソウは城へ入りタイラーの手下に言った。「お前達の兵士のなかで、誰か私と戦う勇気のあるものはいるか。」兵士達は城主二人が死んだのを知り、闘う必要がなく、シャンソウに許しを請うた。「私たちをお許し下さい。何を言われても何でもいたします。」シャンソウは言った。「タイラー兄弟は悪事を働き、今日命を落としたのは罰せられて当然であり、自業自得だ。お前達も悪事をしなければ許す。」

兵士達はシャンソウを部屋で休ませ、酒を飲ませた。この時、空に何羽かの鷹が飛んできて、その中の一羽がシャンソウの名を大声で叫んだ。「私はあなたの兄嫁のウエンチンです。私たちはタイラー兄弟の息子の嫁と彼らの妹をつかまえ、殺すか生命をとどめるかあなたの意見に従う。」

シャンソウは言った。「貴方達はまず席に着いて、あの三人のことは後でまた考えましよう。」鷹はみなもとの姿に戻った。彼女たちはウエンチン、ハージン、フーラン、ノンチャン、スーイェン、それからフーラオホン兄弟二人の妻であった。

みんなが長い時間飲んでから、シャンソウは立ち上がって言った。「私は今回西へいき仇を討ち、みなのおかげで勝利を得、敵を降伏させ、両親の仇を討つことができた。皆何日かよく休み、それから舟に乗って故郷に帰りなさい。兵士達はただちに供え物を用意し、私の両親の神霊を祭り追悼し、三日以内に百艘の船を急いで作りなさい。もし作れなかったら、おまえ達の首を差し出しなさい。」

城の兵士はうなずいた。「必ずその通りにいたします。」

フーランはシャンソウに尋ねた。「鉄籠に入れた三人にはどんな処分をするのですか。」シャンソウは落ちついた表情で声を発さなかった。

ハージンが言った。「彼女達を故郷に連れて帰りましょう！あのジャークターローという娘は美しいし、あなたの嫁にしてもいいと思います。」

シャンソウは少しうなずいて言った。「あなたは、私の命の恩人だ。あなたがそう言うのならそうしよう！」三人の女性は鉄籠の中から出され皆と一緒に酒を飲んだ。

タイルーの妻は涙を流して言った。「シャンソウ・モルゲン、ありがとうございます！私達は必ず牛や馬を世話し、恩に報います。私達の夫の妹は、未だ嫁に行っておりません。私は自分で決めて、英雄に嫁にやりたい。」シャンソウは喜んで言った。「皆が言うのなら、私はジャークターローを傍に置く事にしよう。」

シャンソウと女性達は城に三日間滞在し、四日目に何名かの兵士が報告に来た。「百艘の帆船を造り終えました。けれども少し遅れています。処罰を決めてください。」

シャンソウは言った。「少し遅れているとはいえ、既に船はできているのだから処罰はしない！船を造っている人々に酒を飲ませよう。」

シャンソウとダト達は又一緒に酒を飲んでいて、少し酔いながら皆に向かって言った。「皆今回はとても苦勞した。私はここに深く感謝します。ここで私は皆に宣言します。私の妻は年の順に並んだ方々、正妻をハージン、第二夫人をフーラン、第三夫人をパイルー、第四夫人をジャークターロー、第五夫人をスーイェン、第六夫人をノンチャンとする。」

シャンソウは続けて二十人の兵士に言った。「兵士たちよ、我々は兄弟である。あなた達に家族皆を連れてきて欲しい。妻子を連れて私たちと一緒に行けば、私の故郷で狩りをし、やすで魚を突き、よい生活ができるぞ！」多くの兵士がうなずいて答えた。この時船はすべて組み立て終わり、シャンソウに出航の命令を下して欲しいと伝えに来た者がいた。

シャンソウは川辺まで走って様子を見に行き、すべて整えてすぐに妻子を率連れて船に乗り、出発進行の命令を下した。

その船はフーラオホンの住んでいた城を通過し、フーラオホンの弟のフークーオーが岸辺まで出迎え、酒席を設けて招待した。

酒席でフークーオーはシャンソウに知らせた。「私の兄が百五十艘の船を率いて、ずっと前にあなたの故郷に着いて、いくつかの村落を立て、多くの家を建てています。」

酒を飲み終えて乗船する時、シャンソウはフークーオーに訊いた。「まだ何かあるか？」フークーオーは答えた。「私の十人の兵士を事務管理に残して下さい。」

シャンソウは言った。「どうして出来ないことがあるのか。」話し終わるとすぐ十人の兵士と彼らの家族に、後ほど船の錨を動かして出航し、故郷に直行するように申しつけた。

故郷に帰る

故郷に着くとシャンソウは彼を歓迎する酒席で言った。「皆さん、私の両親の敵討ちを助けてくれてありがとう、故郷の再建を手伝ってくれてありがとう！！明日私達は一緒に南山に行つて百匹の鹿を捕らえ、西山に行つて百匹の猪を捕らえて両親に奉り、神に捧げる。」

次の日の早朝、シャンソウはフーラオホンと十人の兵士と弓矢を持って、一緒に山に登りに行った。三日続けて狩をし、少なからぬ獲物を狩り、家に持ち帰った。

シャンソウの妻子達は、家の内外をきれいに下片付けた。神を奉つてある部屋の西側にある神棚に、百匹の鹿、百頭のノロジカ、百頭の猪、百羽のキジを並べた。既に彼が必要としている数を上回っていた。彼は人々に役を割り当てた。皮を剥ぐ人、肉を切る人、煮る人、洗う人。

肉が茹で上がり、白樺の木の鉢に盛り付けられると、神卓の上に運ばれて供えられた。シャンソウの兄嫁と妻子達は、神服を着て、腰には鈴を帯び、神帽子をかぶり、神鼓を打ち鳴らし、シャーマンの踊りを踊った。シャンソウは各種の肉を小さく切り分け、空に放り投げ、口の中で神々の名前を唱えて、神を奉り、祭は終了した。

彼らは一緒に大通りを回り、出来る限り心を込めて歌い、踊り、領地の百姓達もまた一緒に後ろで踊った。

踊り終わった後、さまざまな獣の肉を数十の卓に並べ、町のすべての老若男女が皆一同に座り、沢山飲み食いし、西方の敵征伐の勝利を慶賀し、シャンソウが故郷に帰って来た事を祝った。

もう十分飲んだという頃、シャンソウは皆に言った。「今日は勝利を祝い、神を奉りました。皆さん満腹して満足して食べ終えて下さい。私達の城には現在一万人もの人がいて、ある者は農作業をし、ある者は家を建て、ある者は漁をし、ある者は狩りをし、人々は労働し、各々が全力を尽くしている。今日の私があるのも全てハージンのおかげであり、私は彼女の両親を迎えて家で扶養したいと思う。」

ハージンは言った。「私はあなたの両親の敵討ちを手伝い終えたらすぐに家に帰つて両親の世話をしたいと心から思っていました。あなたがこのような厚意を取り計らつたので、私はここに留まり、離れないでいる以外にはありません。」

シャンソウは再びフーラオホンに向かって言った。「あなたは家に帰り、必要とする分の船と人のことは恥ずかしながらに何でも言ってくれ。」

フーラオホンは言った。「私は五十艘の船と、船ごとに十世帯の百姓さえあれば、帰つて故郷を築きます。」

シャンソウは二つ返事で引き受け、彼を自身の領地へと行かせた。フーラオホンが行った後、シャンソウ一家は仲睦まじく、楽しい日々を送った。領地の百姓達も皆安心して生活し

楽しく働いた。

イーマーカンの歌手はシャンソウの西方敵討ち征伐の経験を編成して歌い、至る所に広く伝わった。シャンソウ・モルゲンの名声はここから次第に遠くへ伝わり、老人から子供まで皆が知っている。

6.イマカン「シャルン・モルゲン(沙倫莫日根)」の梗概

ウスリー江の源流にイマンという村があり、20戸位民家がある。村のある一軒の家に、夫はシャーシェン・マファ、妻はシャーニ・ママいて、二人の子がおり、男の子はシャルン・モルゲン、女の子はシャーニダドと呼ぶ。四人家族は、漁業と狩猟で生活している。

ある日、シャーニダドは、一羽の鷹に変身して飛んで帰って来て、両親に言った。「イエラグ村に、バーインおじいさんが、自分の娘の婿を探している。娘が河に落とした金魚の飾りがついネックレスを、探し出した人なら誰でも婿になれる。弟は20歳になったが、まだ嫁がない。彼にやらせてみたらどうかしら。」

金魚のネックレスを探し出したものは誰でも婿になると聞いて、20人以上の若者がやって来た。

翌日、若者達が川辺に来て、三々五々木の上に座って待っている。このとき、モトウ・ダドは、皆に言った。「私の金魚が落ちた場所は、松花江とアムール河が合流するところで、そこは深く、流れも急です。勇気のある人は探しに行ってください。」

アジンという若者が、水に入り探し、1時間後に、全身血だらけになって水から出てきた。彼の弟アホンは、魚を捕るヤスを持って水に入って行った。1時間後に水から出てきて、皆に言った。「水の中で、アオハ魚と3回戦って、体に3箇所傷を受けたが、金魚の飾りは手にはいらなかった。」話し終わると、兄弟2人は馬に乗って家に帰った。

ムチュという若者も河には行って行き、同じように1時間後に体半分を水から出し、言った。「あのアオハ魚は、1000年修行し、能力がすごく、誰も太刀打ちできない。私は、3回戦って、2箇所傷を受けた。」彼は、浅瀬を歩いて戻って、馬に乗り家に帰った。

自分より勇敢な3人の若者がアオハ魚に負けて、金魚を手に入れることが出来ず、傷を受けたのを見て、他の若者達は皆何も言わずに家に帰っていった。モトウ・ダドと両親は、悩み始めた。

また、シャルン・モルゲンは、バーイン・マファの家に行く途中で、一人のお爺さんに出会った。お爺さんは、シャルンが婿選びに挑戦すると聞いて、金の斧を貸し与えて言った。「金の斧をよく包んで背負い、決して触っていけない。」その他に、元気を付ける3個の丸薬を飲ませた。

シャルン・モルゲンは、お爺さんと別れてから休まず歩きつづけ、夕方バーイン・マファの家に着いた。バーイン・マファは、「お前、帰ったほうがよい。だれもあのアオハ魚の側に近づけないよ。もう3人勇敢な若者が挑戦したが、誰もその魚に勝てず、金魚も探し出せなかった」と言った。

シャルンは、言った。「貴方達は、私が背が低く力がないと思っているだろうが、心配しないで下さい。明日、私は河に入ってあのアオハ魚と戦う。必ず、あいつを征服し金魚を取り戻してくる。」

翌日、夜明け前に、シャルン・モルゲンは、川辺に来た。上着を脱ぎ、帯を締めなおし、右の手に金の斧を持ち、河に入っていった。一刻過ぎてもまだ出てこないで、人々は心配し始めた。また一刻過ぎたその時、川面が沸き立ち、長い時間大きな波が起き、そして静かになった。暫くたつと、三つの江の合流点で、川面が沸き、白波が巻き、そしてまた静かになった。

また暫くすると、シャルン・モルゲンが水から出てきて、皆に言った「私は、川底に潜り、アオハ魚を探し出した。魚は全身に刀や槍のような刺が生えている。私は金の斧で刺を切り落とし、魚を殺して、お腹に入っていた金魚のネックレスを取り出した。」

マトウ・ダドは、喜んで金魚ネックレスをシャルン・モルゲンの首につけた。そしてアオハ魚を神柱の下に運ばせ神に捧げた。また、酒席を用意し、人々にご馳走を食べさせた。

皆が喜んで飲みながら話しているとき、ムチュ・モルゲンが立ち上がって話した。「シャルン・モルゲンは、今日勝ったけれども、私はもう一度彼と戦いたい。彼が挑戦を受けなければ勇気がない、勝たなければ能力がないことになる。」

このとき、アージンとアーホン兄弟も立ち上がって言った。「シャルン・モルゲン、金魚のネックレスを取り返しただけではだめ。次の三つのことが出来ないと言えない。一つは、百歩離れたところから3回矢を射て、3個の穴明き銭を射通すこと。一つは、200キロの重さの石を持ち上げること。最後の一つは、三尋の大きさのウルグリ竜を殺して背負って帰ってくる。」

若者皆は、この挑戦に賛成し、次の日試合を見終わってから帰ることにした。

翌日の朝、マトウ・ダドは料理し終わったアオハ魚を人に運ばせ、神前に捧げた。自分は、神帽をかぶり、神衣を着て、腰鈴を下げ、神鼓を持ち、シャーマンの舞を踊りながら、祈禱を言った。「諸々の神様、私1000年生きてきたアオハ魚を神様に捧げます。神様、アオハ魚の匂いをかいで、サツキの香りを嗅いだら、私の捧げ物を受け取ってください。シャルン・モルゲンは、ここに来て、この魚を殺し、金魚のネックレスを取り返した。私は、彼の妻になり、一緒に暮らしたい。」

太陽が昇り、若者達は皆試合の場所に来た。そこに一本の竿を立て、上から3個の穴明き銅銭を吊るしてある。銭の穴は小鳥の卵くらいの大きさで、下に赤い布を下げている。近くに、200キロ以上もある大きな石が置いてある。

ムチュ・モルゲンは弓を持ち上げ、3本の矢を射た。始めの2本の矢は、銭の穴を射たが、3本目は外れた。アジン・モルゲンも3本の矢を射て、始めの1本は当たったが、残りの2本は外れ、草地に落ちた。アホン・モルゲンも3本射たが、1本も当たらなかった。

シャルン・モルゲンは、弓を持ち上げ、ピュー、ピュー、ピューと連続して3本の矢を射て、全部射通した。皆一斉に叫んだ「シャルン、神の射手だ」

続けて、石を持ち上げる試合だ。ムジュ・モルゲンは胸まで持ち上げることが出来た。アホン・モルゲンは腰まで持ち上げた。シャルン・モルゲンは石を少し揺り動かし、石の両端を掴み、一気に頭の上まで持ち上げて、試合場を3回周り、石を元の場所に置いた。その場の人は皆親指を突き出し、凄いと表現した。

モトウ・ダドは、言った。「ここから南の方10数里のところに、山があり、山の西側の雑木林に3尋のウルグリがいる。それを殺したものが、この試合の勝者です。」

ムチュ、アジン、アホンの3人のモルゲンは、先を争って山麓に着き、ウルグリを探し出した。ウルグリは彼らに言った。「俺は、ここに300年以上住んで、多くの人が射殺しに来たが、皆食べてしまった。お前ら命が惜しいなら早く帰れ。さもないとかみ殺すぞ。」

アジン、アホンは怖くて、手が震えて、矢が外れてしまった。ウルグリは、猛然と飛びかかり、二人を捕まえ頭を食べようとするとき、ムチュ・モルゲンは走りより、ウルグリの胸を蹴飛ばした。ウルグリは二人を放り出し、ムチュに飛びかかって来た。ムチュは急いで、矢を1本射たが当たらなかった。ウルグリは彼を体の下敷きにした。

このとき、シャルン・モルゲンがやって来た。彼は1本の矢をウルグリの心臓に当てた。ウルグリは、大きな叫び声をあげ、高く跳び上がり、ドサンと地に落ち、死んでしまった。

ムチュ、アジン、アホンはシャルン・モルゲンの前に来て、跪き言った。「もし、貴方が私達を救わなければ、一巻の終わりだ。命を助けてくれてありがとう。」

シャルン・モルゲンは、彼らを立ち上がらせ、ウルグリの肉を担いで村に帰った。

彼らは、また神前にウルグリの肉を捧げた。モトウ・ダドは、神帽をかぶり、神衣を着て、腰鈴を下げ、神鼓を叩いて、神に言った。「神様、早く来てください。私は、ウルグリの肉を捧げます。試してください。ウルグリを殺した英雄はシャルン・モルゲンです。」

若者達、酒を飲むとき、ムチュ・モルゲンは言った「もし、シャルン・モルゲンが助けられなければ、私達の命はなかった。今、シャルンが、モトウ・ダドを妻にすることを共に喜ぶ。焼餅を焼きません。彼と兄弟になりたい。」他の若者達も彼らが義兄弟になるに同意した。シャルン・モルゲンは立ち上がり、ムチュ、アジン、アホンと義兄弟になることに同意し、神前に誓った。

義兄弟になった後、彼ら四人は一緒に近くの村を全て見舞いに行った。シャルン・モルゲンが、ムチュ・モルゲンの住んでいる村から帰る途中で、四人の若者がシャルン・モルゲンを殺そうとしていることに気が付き、四人を捕らえて聞くと、ムチュ・モルゲンに頼まれたと白状した。シャルン・モルゲンは皆と相談して、ムチュ・モルゲンを村へ帰らせた。今回は許すが、再び悪いことをするなら、許さないことにした。

その後、シャルン・モルゲンとモトウ・ダドの婚礼が行われ、3日間賑やかであった。

7. イマカン「スス」の梗概

昔、河辺に兄弟2人が住んでいた。そのとき、河には水しかなく、山には実の生るもなく、獣を見かけることはすくなかった。兄はやっと嫁をもらった。

ところが、嫁はやさしくなく、毎日弟に辛くあたった。嫁は彼が多く食べるのが嫌いなきもあるし、働かないことが嫌いということもあった。弟が17、8歳になっても、寝る布団もなく、冬も夏もぼろぼろのノロ鹿の皮しかかけていなかった。嫁が機嫌が悪いときは、弟は一日ご飯が食べれなかった。機嫌がよいときは、茶碗を与えられ、台所の片隅で飯をかき込んだ。兄は毎日山に狩猟に行き、家のことは何もしらなかった。

ある日、兄嫁が弟を呼んで、ぶっきらぼうに彼に言った「出て行け。川の水はどちらに流れている？」

弟は「はい」といって出て行った。彼は拾った柴を一東河に投げ込んだ。柴は流れに沿って流れ、東の方に流れていった。彼はまた拾った柴を一東河に投げ込むと、渦に巻き込まれ西の方に流れていった。弟は、河のこのあたりの湾では、渦が巻くと、たまに西へ、たまには東に流れることを知らなかった。弟は、どちらが西で、どちらが東か分からなくなり、川辺に座り込んで、涙が出て、家に帰ることもできなかった。

「どちらが東で、どちらが西だよ？お兄さんもう帰れない、このあとどう生活すればいいのか？死んだほうがいい！」彼は河に向かって悲しく歌い始めた。

ディダカニ、スス。

ディダカニ、スス。

私はもうすぐ死んでしまう。

私の骨格を大きな樹に変じて、

腕を樹の枝にして、

二つの耳はハマグリになり、

血を河の水にしましょう。

筋肉は白い泡となり、

身は亀になり、

頭はタトウになり、

歯は川辺の玉石になり、

目はモモニュウになり、

花は魚と海老になろう。

スス、スス

ディダカニ

スス、スス。

歌っている間に、彼の全身の骨と肉は川辺に散らばり、一つ一つ今まで川辺にないものが出てきた。こうすると、水鳥、大雁が飛んできて、みなとまるどころができ、食べ物を探すことができた。彼の骨と肉は変わって、変わって、最後に心臓だけはまだ生きていて、彼は山のほうに狩猟に行った兄さんを思い出し、また泣きながら言い始めた。

スス、スス

ディダカニ

スス、スス
私は三歳のとき
母はなくなり、
5歳のとき、
父は船でなくなった。
すべてお兄さんが育ててくれた。
今私はお兄さんと別れ
河が私の家です。

歌っているうちに、河の中に、ハマグリ、亀、モモニユと生きている魚、海老が飛び跳ね水の中に白い泡ができた。川辺の砂場には、色々な玉石がでてき、川の両側は生い茂った森になった。

兄が帰ったとき、弟が見えないので嫁にきいた。「弟はどこへ行った？」嫁は答えた。「ある日川辺に行きもう帰ってこない。」

兄が川辺に走っていくと、河の中に多くの魚、海老、ハマグリ、モモニユがいた。兄はこれらがどこから来たのだろうと不思議に思った。

長い時間経つと、兄は弟がもう帰らないと悟った。川辺のあの大きな樹、また沢山の食べることができる生き物は、かわいそうな弟が残したものだろう。

8. タルング「白城人の子孫」の梗概

年寄りは、「私たちホジエン人は、白城人の子孫だ」という。

伝説によると、昔、岳家の軍隊と金兀術が戦い、岳家の軍隊は白城を包囲した。金兀術は白城を守るため、既に準備していた。だから岳家の軍隊は半月以上包囲しても城を奪うことができなかった。大将牛皋は、城の攻略方法を思いついた。

翌日、兵士たちは酒樽を担いで城壁の下に運んだ。彼らは火を焚いて暖を取り、楽しく飲み始めた。

守る側の年取った兵士が、敵が酒を飲んでるのを見て、酒をくれるように頼んだ。岳家の兵士は、瓢箪に酒を入れて城上に投げた。守る側は、酒を受け取るとみんなで飲みまわし、タバコ一服吸ううちに、すべて飲み干した。また岳家に酒をくれるように頼んだ。岳家は言った。「酒はたくさんあるぞ。でも雀と交換しなきゃ。よし、雀10匹と、ひょうたんいっぱい酒との交換だ」

守る側は、「いいぞ」。すぐ町中のすべて家の軒や樹上から雀の巣を取った。最後に数えるとき数千匹の雀を捕まえ、数百本の酒と交換できた。兵士たちは一杯さらに一杯と気持ちよく飲み、皆酔っ払ってしまった。

岳家の偵察は、すぐこれを牛皋に報告した。牛皋はこれを聞くと直ちに、「午前2時に食事を作り、5時に城を攻めろ」と命じた。

その夜、岳家の兵士たちは、雀の足や尾に紙よりを結び、それに火をつけた。するとピー

ピーと数千羽の雀が驚いて火がついたまま、一群のミツバチのように城中へ飛び去った。

火のついた雀がとまると、すぐ火がつき、燃え広がり、瞬く間に城中が火と煙に覆われた。

このように岳家軍は、城内の混乱に乗じ、鐘太鼓を打ち鳴らし、関の声は天を震わし、一挙に城を攻め落とした。金兀術は、頭が混乱し、驚いた鳥が飛び立つように、残った兵士を連れてやっと包囲を突破し、北のほうへ命からがら逃げた。

彼らは、数ヶ月かけてサハリマンマ（ホジエン語でアムール川の意味）にたどり着いた。このとき天気が暑く、川は大きく波立っており、近くに川を渡る船を1艘もさがせなかった。金兀術はいくら急いでも仕方がないので、川辺にテントを張り休むしかなかった。

ある日、彼は自棄酒を飲んだあと、長男に「川が凍っているか見て来い」と聞いた。長男は、「お父さん、まだ夏だよ。凍るはずはない」と答えた。

金兀術は怒って、怒鳴り散らし、「まさか、ここでわしの全軍が全滅するのか。誰かすぐ来い。こいつを外に連れていき、首を切れ。」

翌日、金兀術は酒を飲みながら、また次男に同じ事を聞いた。次男は、まじめに正直に父に「夏だから、凍るはずがない」反論した。

金兀術はこれを聞いて、怒鳴り散らし、家来に命じて次男を殺させた。

三日目に、金兀術は飲んで酔って、三男に同じ事を聞いた。

三男は考えた。二人の兄が川が凍っていないと答えて、父に殺されてしまった。私も凍っていないと答えたら、同じように殺されるだろう。彼は一時悩んで、どう答えればよいか分からなかった。彼は一人で川辺に行き、とうとうと流れる川に祈った。

天の神様

地の神様

タンニモドンタ（人間を管理する天の神）

ジュリン（家を守る神）とジュレン（保護する神）

もしわたしは死ぬ運命でなければ

もし、白城人が生き延びることができるならば

サハリマンマを三尺凍らせ

私たちに川を渡らせてください

彼がこう祈り終わると、すぐ天気が寒くなり、雪が降り、寒い風が吹き、真冬のようになった。川の表面が凍り始め、互いにカチカチぶつかり、しばらくすると、氷がつながり川の両側を渡す氷の橋ができた。

三男はこの様子を見て、喜んでテントにもどり、父に報告した。「アマ（お父さん）、天と地が私たちに同情し、6月の天候で川の上に氷の橋ができ、私たちに川を渡らせる。」

金兀術はこれを聞くと大いに喜び、すぐに人を川辺に行かせて調べさせた。本当に6月のアムールが厚く凍って、人や馬が渡っても大丈夫かと。そして金兀術は、兵士と民を連れて、順調に川を渡った。

話をすれば不思議だと思う。金兀術の人と馬が渡り終わると、氷の橋はカチャカチャと砕

け、水になった。岳家軍が川辺に追いかけてきたが、ただ川を見てため息をつくしかなかった。

金兀術の兵士と村民は川を渡ったあと、食料がなくなり、兵士たちはただ毎日魚を釣り食べるしかない。しかし、釣れる魚は少なく、全員で食べるには足りない。金兀術は側の兵士を連れて食べ物を探しに上流に行った。彼らは途中で草を地面に突き刺し道しるべを作った。ところが、風が吹いて草の方向が逆になり、後続の人は道に迷い逆の方向に進んで、前の人とますます離れてしまった。終に彼らは、松花江、混同江、アムール、ウスリー江流域に散らばり、長く定住し、狩猟と漁業で生きてきた。

その後、人々は当時川辺に定住した人を「キルン」と呼び、川に沿って西のほうに行った人を「ソルン」と呼び、東の方に行った人を「ホジン」と呼んだ。清の時代から、「ホジエン」と統一された。

今までも年寄りの人が、ナニユオ（ホジエン人の自称）の先祖は当時の白城人であると言う。

9. タルング「七兄弟」の梗概

昔、北方の部落に何年も争いが続いていた。勝った方が負けた方の町や村を占有し、捕まえた男は奴隷に、女は妻や妾になる。彼らは財産を奪い、家を焼き、至る所を廃墟にした。

ある年、西の部落と東の部落が漁場と狩場を奪いあい、生死を賭けた争いがあった。西の部落は東の部落を打ち負かし、町や村を奪って空にした。東の部落の人はある人は死に、ある人は逃げ、ある人は奴隷になった。最後に残った7人は羊の群れの中に暗くなるまで隠れ、やっと山のほうに逃れた。

この7人はそれぞれ蘇、畢、付、尤、呉、葛、芦という苗字を持っている。難を逃れて、今後は兄弟の契りを結び、いつか故郷に帰り、敵を追い出し、部落を再興することを天に誓った。

彼らは山では狩猟で生活し、獣皮を着て、獣肉を食べ、瞬く間に3年たった。ある日蘇氏の長老が言った。「私たち兄弟7人、このまま山で死んでしまうより、別々に外へ出て新しい生活を見つけた方がいいだろう。」兄弟たちはその通りだ思い、別々に山を下り、自分の生活を探しに行った。

日蘇氏の長老は、葛氏の一人と芦氏の一人を連れて、三江口から出発して、松花江に沿って上流の方に行った。彼らは進みながら、魚を取ったり獣を狩ったりして、三年進んだ。この三年間、彼らは争いで廃墟となったハラス（現在の地名：同江鎮）を通り、繁華なトスカ古城を過ぎ、高く聳えるウルグリ山を越え、アンバンビラ川を渡り、人骨が散らばっているジャムス（現在の地名：ジャムスはホジエン語で骨格という意味）を抜け、松花江と牡丹江の合流する地域についた。3兄弟は、ここに山があり、水があり、風景が美しく、土も肥えており、採れるものが豊富であることを見た。そしてここに定住し、妻を娶り、子供をもうけて、よい生活をしている。後世の人は、ここをイランハラと呼ぶ。（イランは三、ハラ

は苗字の意味)

そしてまた畢、付、尤、呉の4兄弟は、別々に松花江、アムール、混同江、ウスリ江辺のガルダン、ムアラホクオ、イリガ、スパイに住んで、家庭をつくり、子孫も生まれた。彼らは皆、漁業と狩猟で生きているから、船を漕ぐこともでき、馬にも乗れ、体が頑丈で長命であった。

今日苗字が蘇、畢、付、尤、呉、葛、芦のホジエン人は、この七人の兄弟の子孫であると言われている。

10. ショウフリ「姉と弟」の梗概

昔、酷い洪水の後、ソロンの山の下、ノリの川辺では、すべての人家がなくなり、残されたのは姉と弟二人だけだった。

弟は7、8歳になったとき、姉が彼に弓と矢を作り、野外へ鳥を射りに行かせた。また彼を森に行かせて、テンやノロ、鹿を狩らせた。18才になると、弟は聡明で有能な男になり、矢を射ると百発百中の腕前になった。姉は家で皮をなめし鹿の筋を縫い、針仕事も上手になって、顔も益々綺麗になった。

世間では「男は大きくなると嫁をとる、女は大きくなると嫁に行く」といわれる。しかし、この深い森林に村もない所で弟はどこから嫁をとる、姉もどこに嫁に行く。これからの生活どうしようと姉がずっと考えていた。ある方法を考えついて、弟に言った「弟よ、私たち2人はもともと血のつながりがない。洪水で2人しか残されなかった。今あなたは成人し、家庭を持つ歳です。私たちもう分かれずに、一緒に生活しましょう。」

一年後、彼らに子供ができた。弟はすぐ揺りかごを作り始め、もう出来上がるというとき、一つの蔓が足りない。弟は斧を持って、鮮やかな紅色の木質が硬い紅毛柳を探しに行った。森に入ると、突然鳥がチチと囀る歌声が聞こえた。

ネザカタ、ネミンカ、フフ

フナジハンタイティミンシ、フフ

姉と弟に子供ができるのはよくないよ。

弟よ、だめじゃないか！

彼が山坂を下るとき、鳥も同じように歌い、川辺についたときも、鳥はまたこのように歌った。鳥の歌を聞いて、弟の心は乱れた。やることも続けられず、紅毛柳の揺りかごも作れなくなった。家に入ったとき、姉は「揺りかごを作る材料を探してきましたか。どうして機嫌が悪いのですか」ときいた。

「ああ、言わないでくれ。私どこへ行っても、鳥たちが涙を流し、“ネザカタ、ネミンカ、フフ。フナジハンタイティミンシ、フフ”と歌ってくれた。

鳥が歌えば歌うほど、私の心を悩ませる。本当に聞き続けることができず、そのまま帰ってきた」

姉はこの話を聞くと、心に衝撃を受け、泣きながら「姉の私が弟を騙したのです」といっ

た。山の鳥たちがこのように歌っている、後世の人に知れたら、さらに人に笑われるのではないかと思い、考えれば考えるほど恥ずかしく悔しかった。弟が注意していないとき、家の後ろの川に飛び込んで死んでしまった。

それ以降、ずうっと姉と弟、兄と妹が結婚することがなかった。

11. ショフリ「蛇娘」の梗概

昔々、お婆さんとお爺さんが住んでいた。子供がいなかった。ある日子供ができ、子供を生んだ。よく見ると二匹の蛇だった。おじいさんが、二匹の蛇をみて怒って、お婆さんに言った。「二匹の蛇を捨てろ。」おばあさんは、泣きながら、二匹の蛇を木箱の中に入れ、毎日乳を与えていたが、ある日蛇はいなくなった。おばあさんは悲しんだ。お爺さんは言った、「泣くな。私が探しに行く。」おじいさんは出かけた。二匹の蛇を探しに行った。歩いて、歩いて、一つの家を見つけた。お爺さんが、家に入ると、二人の娘がいた。二人の娘も父を見た。この二人の娘は、父が私達を殺したかったことを、覚えていた。父を土のオンドルに座らせて、まずいご飯をだした。父が食べ終え帰えるとき、この二人の娘は何をあげようかと考えた。この子供は、蛇をあげましようと考えた。お爺さんは、家に帰り、お婆さんに言った。「二人の娘を見つけた。」母は思う、「私も行く。」この母が行った。二人の娘は喜んだ。母が来た。良いオンドルの上に座らせ、良いご飯を食べさせた。食べ終わって この二人の娘は思った。何をあげよう。姉は言った。「金をあげましよう。」おばあさんが出発し、後ろをみると、もう家と娘はなくなっていた。

文献

- [1] 于曉飛：“ホジェン族の叙事詩「イマカン」から、千葉大学社会文化科学研究第4号、pp. 365-373、(2000年2月)
- [2] “香叟莫日根”、黒龍江民間文学、第二集（赫哲族民間文学選集）、pp. 183-271、中国民間文芸研究会黒龍江分会（1981年ハルビン）
- [3] “沙倫莫日根”、伊瑪堪（下巻）、pp. 263-318、黒龍江人民出版社（1998年）
- [4] “蘇蘇”、中国少数民族民間文学叢書・故事大系「赫哲族民間故事選」、pp. 9-11、上海文芸出版（1982年）
- [5] “白城人的后代”、pp. 1-4、同上、
- [6] “七兄弟”、同上、pp. 5-6.
- [7] “姉弟二人”、同上、pp. 7-8.